

令和4年2月1日

京口門だより No. 100

例年になく寒い冬が続くうちに早や立春が訪れます。疫病の流行はなかなか矛を収めてくれません。誰が悪い、どこが良くないと非難してもウィルスの耳には届かないでしょう。注意深い対策をとりながら過ごすことにしましょう。

その中で漢方薬は役に立つと言えます。「音なしに春こそ来たれ梅一つ」(召波)

最近の新聞記事にケアの意味について書かれたものがありました。ケアとは介護や看護を意味することですが、ケアすることは相手をケアするだけでなく、相手から自分もケアされて互いにケアされることでもあると述べていました。そこには、単に手助けをするということではなく、深く広く相手を知ることにより濃密なケアが成り立つとも言えます。たとえば、病棟のすぐれた看護婦さんは患者さんの心の安心にも寄りそうことができます。

昨今は SNS などが進歩し、人と人の対面の会話が減ってきて、目を見て人と話をすることによって単なる情報だけでなく、豊かな感情を見いだすことができなくなっています。

現在の医療についても、医師の前には大画面のコンピューターが置かれ、データ(情報)を見ながら診察していることが多いようです。現代の医療はエビデンス(科学的根拠)による医療と言われているから、直接の患者さんから話を聞くよりも検査による情報のほうが頼りになると考えられています。そうして早期発見・早期治療でうまくゆくことはありますが、治療が困難であったり、不可能であるような病気や重度の障害を持った人などでは、よくその人の物語を聞く必要があります。物語とはその病気になった始めからの経過や、今に至るまでどんな経過があったかを聞くということです。その中から病気の治療に必要なヒントや方法が見つかることがあります。とくに初めて診療を受ける時こそ大切で、その患者さんの物語に耳を傾けることが大切です。

漢方医療では現代医学のように多くの機器を用いて検査するわけではありません。むしろ是非とも必要とあれば検査もしますし、他の機関に依頼もします。大切なことはよく話を聞くことです。その中から重要な情報が得られ治療に結びつくわけです。こうした物語を聞くという医療は現代の医療の中でも注目され、イギリスの医師たちは「物語に基づく医療」ということを主張しています。むしろ「科学的根拠による医療」を無視しているわけではありません。

